君にしかできないっ！【考察する魔術師】

ヰぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君にしかできないっ！【考察する魔術師】

【Ｎコード】
Ｎ１９３１Ｚ

【作者名】
ｷｲ

【あらすじ】
とある魔術の世界。少し名の売れた孤独な魔術師の青年は、とある人助けを機に人生を狂わせてしまう。
…これは好転か？悪化か？

変化の前に

【～〇～変化の前に】

こんな夜は、アレに限る。

彼は、レンガの壁を撫でながら、ゆっくりと、地下室へと続く薄暗い階段を下りた。

左手には三十センチほどの『魔法の杖』が持たれており、杖の先にはあたりを照らすには十分な光がともっている。

地下室へと降りた彼は、一度、杖を振る。

すると、あたりの蝋燭と、天井の小さなシャンデリアに乗せられた蝋燭の全てに火が灯った。

地下室は一瞬にして、優しい橙の光に包まれる。

そこは大きな倉庫だった。

倉庫には等間隔でいくつかの棚が配置されており、棚にはガラスボトルが並んでいる。

「今日はこいつだな」

その中から一本、彼はボトルを取り出した。

光一つ取り残さず反射するほど美しく磨かれたボトルの、赤いラベルには、白い文字で「ミュンジュース～１２４６～」と書かれている。

彼はアルコールが嫌いだ。

摂取推奨年齢である二十歳に達していないというのもあるが、アルコールは魔術者の体中を巡る魔術線を侵し、魔力の流れを乱雑にして魔術の精度を下げてしまうからだ。

しかし彼は、アルコールとは比べ物にならないほど、このジュースを愛している。

秋が旬のミュンは、桃色をした完全なハート型の果実で、甘みが強く、その影にツンと刺すような酸味が覗く味を持っている。

このジュースは、そんなミュンを絞ってジュースにし、何年も寝かせたものだ。

寝かせれば寝かせるほど、ミュンの甘みは穏やかなものとなり、独特の酸味はその棘を丸くする。

彼が今、手に取ったのは、その百年ものだ。市場価格にして、２０００グランの代物である。

ちなみに参考として、この国で最もベターなジュース『ライフギル』は１０グランで買える。

重ねて参考として、この国の平均年収は１５００００グランだ。

彼がボトルを手に取り、階段出口のすぐ隣の壁に貼り付けた紙に取り出したボトルのナンバーを書き込むと、来た時と同じように杖を小さく振って全ての光を杖の先に集めて消し、階段を上がっていった。

階段を上がって一階に出ると、まず木のダイニングテーブルが目に飛び込んでくる。

白いテーブルクロスがシャンデリアの光を照り返した。

彼はテーブルにミュンジュースを置くと、キッチンでポトフを浅い皿に盛り付け、テーブルへと運んで、一人で食事を始める。

「やはり、ガロージャの百年物は格別だな」

そんな独り言も、誰の耳にも入らず、宙を舞った。

こうして彼は、また一日を終える。

孤独な、一日を。

変化の予兆

【〜〇?〜変化の予兆】

相も変わらず完璧な朝だ。

彼は、満足気な表情で食卓にトーストを並べ、ウインナーが三本と目玉焼きが乗った白い皿を同じく食卓へ並べた。

彼こだわりのコーヒーを配膳すれば、完璧な朝食である。

「さて、頂くとしよう」

齢十八とはいえ、元貴族。

礼儀正しく食器を取り、料理に手をつけようとした。

刹那、ドアが何度も叩かれる。

彼はつい眉を顰めた。

起床時の空腹は、少なくとも彼にとってとても不快なものだったから。

だが、客人をもてなすのも礼儀だ。

ドアを叩く音が家中に響く中、ハンガーに掛かったマントを羽織り、腰の右側に自慢の杖『ヴルカーノの六番』をホルスターで吊ると、覗き窓を開いて外を見た。

しかし、相当背が低いのか、覗き窓からでは誰の影も確認できない。

仕方ないと、彼はドアを開いた。

「遅れて済まない」

そう言った直後、彼の瞳に真っ赤なコートが焼きついた。

彼は、すばやく一歩距離をとり、ホルスターから六番を抜く。
目前の人間は、赤いコートに赤いベスト、裾を絞った白いズボンを着用していた。
この服装は、彼が最も嫌うものだ。
「その服装…リバルド帝国軍の魔術研究ギルドの人間と見受けるが、貴様は何用でここを訪れた。言っておくが、私はもう魔研ギルドに戻る気は無いぞ」
強い語勢で言い放つ。

彼は祖国である、リバルド帝国の魔術隊の技術研究を担う『魔術研究ギルド』の所属であったが、過去、ある事件を経てそこを辞めた。
だが、フリーランスの魔術師となってからも、魔術研究ギルドの魔術師は何度も彼を引き戻そうと、乱暴な手段も厭わずに彼にアプローチし続けたのだ。
彼はそんな事もあり、魔術研究ギルドの魔術師を一層、嫌うようになった。

ところが、目前の帝国魔術師は、上目遣いで、彼に訴えかけた。
今までの帝国魔術師からは想像できない様な涙声で。
「ヴェルガ!!　君だけが頼りなんだ!　我々を助けてくれ!」
そこに居たのは、美しすぎる金の短髪を持つ美少女だった。
吸い込まれそうな青い瞳が彼…ヴェルガその人を見つめている。
背中には、大型の軍用の杖である「正式採用十八式魔槍」が背負われていた。
「い…いきなり何を言うんだ」
「我々を助けてくれ!」
彼、もといヴェルガは、困惑した頭のまま、ともかくこの少女の話を聞くことにした。
「良いから、中に入って話を聞かせるんだ」

魔力の流れを絶つ機能を持ったマントを羽織ったまま、ヴェルガは彼女を自らの向かいに座らせた。
朝食は、魔法で移動させてすぐ近くの棚にしまっておいた。
「話を始めてくれ。私も用事の途中でね。…さあ、飲みたまえ」
ヴェルガは、水を彼女の目の前に出したコップに注ぎながら告げる。
「ありがとう…」
嗚咽を含んだまま礼を言って、両手でコップを持ち、少女は水を飲んだ。
一息ついて、少女は話を始める。
「私が出かけている間に…ギルドの皆が…襲撃を受けたんだ…皆を助けて欲しい！」
「襲撃…か。それは軍からか？　それとも名の知れた山賊か？　まさか野良の魔術師ではあるまい」
「それが…魔獣に…なんだ…」
「魔獣？　そんなものが何故あの地域に居るんだ。あのあたりどころか、魔獣なんて探しても見つからない様な代物だろう」
その落ち着き払った言葉を聞いて、少女は身を乗り出した。
両手で持っていたコップの水は、容赦なくヴェルガに降りかかる。
「だからこそ…軍や騎士団では対抗できないんだ！この頼み事は…君にしか…君にしかできないっ！」
ヴェルガは、その熱意に再び眉を顰めながら、右目のモノクルの水滴を胸元から取り出したハンカチでぬぐった。

【〜〇?〜オリジン】

【〜〇?〜オリジン】

気乗りしないが…良かろう。私は、話に乗ってやることにする。

女性には最大の礼儀を持て。という我が家の家訓もあるが、魔術研究ギルドには忘れ物もしているし、なにより彼らは莫大な資金から私に報酬を払うことになるだろう。

そうなれば、心躍る数字を見られることは決定事項と言っても過言ではないはずだ。

ヴェルガは、ルーニャ、件の少女を家の外に出すと、クリーム色のスーツの上に黒いコートを羽織って、フード付きマントを羽織った。

背中側は鋭利なV型をしている。

ホルスターは戦闘が想定される場合に装備する特殊なものを使う。前部に切込みが入れられていて、いざという時は前部を裂くようにして素早く杖を取り出せるようにしたものだ。

最後に、様々な呪いや、邪悪な空気を吸わぬように魔術式を仕込んだ白いマスクを後頭部に掛けて、準備は完了である。

上半身だけが異様にガチャガチャとして、アンバランスな姿だが、これが長年の仕事で彼が見つけた最高の装備なのだ。

「遅くなってすまない。さあ、行こう」

「うん…」

ヴェルガ邸の建っている深い森林、『ミューラーの森』から、ルーニャを乗せて一キロほど馬で行くと、最寄の町へ出た。

青い空、赤いレンガ畳が美しい町並みを馬に乗ったまま進んでい

ると、ルーニャは何かに気づいた。
何故だか、流れていく街の人々は、ヴェルガを意識的に直視しないのだ。
確かにヴェルガの金の瞳は珍しい色の上に鋭く、その上瞳孔は縦に鋭く長いというものだが、陽光を受けたその瞳は見入ってしまうほどに美しい。
ルーニャは、自らの好奇心を抑えきれず、ヴェルガへとその疑問をぶつけた。
「何故、皆、君の瞳を見ないんだい？　こんなに美しいのに…」
ヴェルガは少しだけ振り向き、ルーニャを一度片目で見ると、すぐに前へ向き直り、口を開く。
「人は賢い。故に、それそのものよりも、それに含まれた意味などに注視してしまうものなんだよ」
「…君は……難しいことを言うね」
あまりに遠まわしすぎて、たった十五のルーニャには意味が解らなかった。
その意味を理解しようと、頭の中で考えを巡らせている間に、馬蹄の音が、馬車乗り場の前で止まる。
ヴェルガは、借り厩舎のすぐ隣で厩舎の馬飼いに金を渡すと、馬を降り、ルーニャの手をとって馬から下ろして、馬車乗り場の方へ歩き始めた。
馬車を使うらしい。
ギルドから来たルーニャも、もちろん馬車を使ったので、特に疑問はわかなかった。
馬を自ら駆ってギルドまで行くのは、金を払ってでも回避したいほどにかなり骨が折れる事なのだ。
ヴェルガは、ルーニャよりも先に金を払って黒いコーチに乗り込む。ルーニャも金を払おうとしたが、ヴェルガがルーニャの分の金を既に払っていた。
暫くの間、二人は特に会話もせず、馬車に揺られていたが、窓か

ら景色を眺めていたヴェルガが突然、何かを思い出したかのように口を開いた。
「ルーニャ、君は魔獣を見たのか？」
「うん、一瞬だけど、しっかり見た」
「その魔獣の…背中は見たか？」
「うん…なんだか…紫色の魔方陣が架けられてた」
「フロータか？　ステアーか？」
「ステアーだったと思う…」
ここで、専門家同士の会話の説明を、少し挟もう。
まず、魔方陣は、円や矩形の間に橋を架ける様に描かれる為、「架ける」という。
次に、魔方陣には、紙や地面に描くことによって架けられるものと、中空に描かれるものがある。直接描かれるものが「ステアー」中空に描かれるものが「フロータ」と呼ばれる。
今回の場合、背中に架けられていたということなので、背中には直接接せず、浮遊するように架けられたのか、直接背中に刻まれたのか、ということをヴェルガは聞いたのだ。

一通り話を聞いたヴェルガは、すぐ後ろの小窓を開けて、馬を駆るコーチマンへ注文を飛ばした。
「次の街で一度停めてくれ。買い物がしたい」
「はい、承知いたしました」
返事を聞いたヴェルガは、再び窓の外へと視線を戻す。

奇妙な旅は、まだ続く。

【〜〇?〜事前準備】

コーチマンへ告げた通り、二人は次の町で一度コーチを降りた。

【〜〇?〜事前準備】

まずヴェルガは、サンドイッチ屋に寄って卵サンドを買い、それを礼儀正しく頬張りながら、街を歩いた。

しかし、先を急ぐルーニャは気が気ではない。

「ご飯なら後で私が奢るから！　だから、早くギルドに急ごうよ！」

天敵に追われる小動物のように焦り、急かすルーニャに、サンドイッチの一口目を飲み込んだヴェルガは一度視線を落して言う。

「まあそう急ぐでない。腹が減っては戦は出来んと東洋の賢者もいっているだろう。それに…」

一度切って、ヴェルガは続けた。

「戦には準備が必要だ。敵が一であると感じれば、百の準備をすることが、必勝のコツだ」

言って、ヴェルガは何故か、ふっと口の端で笑顔を作る。

ヴェルガの足は、続いて魔道具店へとその歩みを進めた。

蜘蛛の巣が張るような、良い様に言えば歴史を感じさせる、悪い様に言えばオンボロの店内に立ち入るや否や、木箱に直接放り込まれている水晶の欠片をあさり始める。

手当たり次第水晶を両手で摘み上げ、天井からぶら下るライトに透かしては箱に戻す。これを延々と繰り返していた。

「ふむ。いい質とは言えないが…十分だろう…店主、これは一つ幾らだ」

「ああ、それなら一つ1．5グランで良いよ。ただ、箱に入れたまま一斉に魔術を流したもんだから、質に期待はするなよ」

「構わない」

ちなみにここで言う0．5グランとは、グランの一つしたの単位『フラド』だ。10フラドで1グランである。つまり、正式にいうなら、この水晶の値段は『1グラン5フラド』となる。

その、魔力を水晶に流し込んだ魔力水晶をいくつか購入すると、次に雑貨屋で布を三枚購入し、サンドイッチをもう一つ買ってコーチへ戻った。

再び馬蹄を響かせるコーチの中、ヴェルガは、チーズサンドをルーニャへ渡す。

「さあ、これを食べてくれ。あの時間では朝食もまだだろう」

「うん、ありがと…でも、何で君は私に優しいんだい？　帝国魔術師は好きではないはずだろう？」

その質問に、ヴェルガは先ほど買った品物を確認しながら応えた。

「確かに帝国魔術師は嫌いだ。しかし、それを相殺して余るほど、女性は麗しい」

そう言ってヴェルガはルーニャの方を見て微笑んだ。

ルーニャには、頬を染めて俯くしかできなかった。

ギルドまでは、もうあと僅かである。

【〜〇?〜魔法鮮烈】

【〜〇?〜魔法鮮烈】

どのくらい、走ったのだろう。

ルーニャが目を覚ますと、そこはギルドの目前だった。

ルーニャを起こしたヴェルガは、一足先にコーチを降り、暗闇に佇むギルドの研究所を望む。

後を追ってコーチを降りたルーニャは、その地獄絵図に我が目を疑った。

研究所の庭にはいくつかの明かりといくつかのテントが設営されており、この度の事件で出動した帝国騎士団の一時駐屯キャンプとなっていたのだが、そこにいるほとんどの兵士が傷を負っていたのだ。

あまりの激痛に悲鳴を上げる者、歯を食いしばって治療に耐える者、意識すらない者…すでに軽症の者の方が少ないという有様であった。

そんな中を、ヴェルガは早足で竦む事も無く歩いていく。

ルーニャもヴェルガの後ろを着いて行くが、こちらは怖ず怖ずといった感じだ。

まるで会社にでも出勤するかのように、ヴェルガはそのまま研究所へと入っていく。ドアの前で一度、騎士に呼び止められたが、ヴェルガは片手で静止してしまった。

研究所の中は、数メートル先も見渡せない程の暗闇に支配されて

おり、不気味な雰囲気に飲み込まれている。壁の所々には血が飛び、戦いの跡を容易に確認することが出来た。

不気味な暗闇の中を、ヴェルガは物怖じすることなく、杖を右手に進んでいく。

その時、ルーニャは、恐怖の中であることに気づいた。

「き、君、左手…」

そう、ヴェルガの左手は今、白い布に包まれているのだ。

無論、ルーニャが眠る直前までは通常通りの手であった。

「これは、『秘策』だ。それよりも、君は外で待っていた方が良いんじゃないか？」

「ううん！　私も行くよ！　私も皆を助けたいんだ！」

そう言った瞬間、天井側から大きな物音がした。瞬発的に、ルーニャはしゃがみ込んでしまう。

「天井の板が外れたのだ。今は良いが、いざ目標と接触した時に腰を抜かされては困るぞ」

「あ…ごめん」

ヴェルガの手を貸りて、ルーニャは立ち上がった。

それも束の間、再び天井の板が落ちた。どうやら先ほどの板に連なって落ちたらしい。

しかし、見てみればルーニャは再び地面に伏していた。

「はぁ…さ、進もう」

……暫く進んでいると、次第に物音が増えていくのが分かった。

しかも、唯の物音ではない。何かが何かを強く、何度も揺さぶる音や、足音が近づいてくる音。

その音達はルーニャの膝を振るわせるには十分すぎる力を持って

いた。

ガタガタ震え、ヴェルガにしがみ付いたまま、ルーニャは先を急ぐ。気分だけは、先を急ぐ。

ヴェルガは、といえば、終始無言で周囲を観察し、歩みを進めるのみだ。

その時、ヴェルガが小さな声を上げて、足を止めた。

「ここだ…。グレートフロウの流れが停滞している。魔力が幾つか点在しているな。数は十も無いが…」

「グレートフロウ！？　君、グレートフロウの流れが読めるのか？」

「ああ、空気中に漂う埃のように、青い魔力が流れているのが見える。普段は邪魔でしかないがな」

グレートフロウ。それは大気中を流れる、宇宙から供給される魔力だ。

強力な魔法、強力な魔術の類全ては、呼び水となる魔術師本人の魔力以外はこのグレートフロウからエネルギーを供給される。

グレートフロウは薄く広く広がるエネルギーのため、呼び出された時以外は無色無臭だ。

通常は、大型術式水晶などで観測するのだが、極々希に、そのエネルギーを裸眼で観測できるものが居る。

この能力の持ち主を、人は『ゲイザー』と呼んだ。

場面戻って研究所。

もし本当にグレートフロウの流れが滞っているならば、この辺りで強力な魔術が発動している証拠だ。

そのことを実証するため、ヴェルガは足元に杖を向け、呪文を唱える。

「レ・ヴィー・タ・ルーダ」

これは、ヴェルガの習得している、魔法流派の中で最古の魔法流派。
『王の詠唱式魔術』にある魔力の痕跡を見る為の魔法だ。
詠唱には全て法則があるのだが、この解説は長くなるため割愛しよう。

杖の先から放たれた青い光は、末広がりになりながら地面を照らした。
その地面には、人の素足と思われる足跡が残っていた。
「ふむ。人の足形をしているが…違うな。魔力の含有量が高すぎる。となれば…猿か…悪魔の類か」
辺りを照らし続ける杖は、続く足跡を辿り、壁へ移った。
壁にも足跡が刻まれていることから、魔獣は縦横無尽に壁を移動したと推測できる。

杖は尚も足跡を追う。
足跡は、天井へと上り、そこで途絶えていた。
「後方へつま先が向いている。ここで途絶えているということは…後ろか」
冷静に言いながら、ヴェルガは後方を睨んだ。

刹那、走り来る影にルーニャの悲鳴が響く。
「わぁぁぁ！！」
続けて、影に杖を向け、ヴェルガが詠唱した。
「ダール！！レイ・ヴォー・ギルア！」
ヴォルガの杖から発された青い光は影に当たり、その動きを一瞬弾き返し、
「レイ・ヴー・ギルア・ルーダ！」
その影を壁に叩き込んで、動きを抑え込んだ。

ヴェルガは、杖を突きつけられ、壁に押さえつけられたまま唸るその生き物を注視した。
「ふむ。醜いな。…これが魔獣の正体か」

そこにいたのは、人型の生物だった。
肌も、体も、人と同じ構造をしているが、その顔面は酷いものだ。
唇は無く、むき出しの歯は赤く染まって鋭い。
その上、目はくり貫かれているのか眼球が無く、黒い空間が広がっていた。
髪などは一本たりとも生えていない。
「うえ…」
ルーニャが呻くように言った。
そんな事は気にもかけず、ヴェルガが詠唱を紡いだ。
「レイ・ヴェー・ラ・グレン」
すると、魔獣はより一層抵抗を激しくし、暫くして動きを止めた。
どうやら死んだらしい。
「ダール」

拘束を解いた死体を放って、ヴェルガはきびすを返して奥へと進んだ。
「あいつ、ホントに魔獣？」
そのルーニャの質問に、ヴェルガは振り向くことも無く答えた。
「いや、アレは、魔獣ではない。魔術式生成生物だ」
「え？　なにそれ」
会話は続く。
「別名を、ホムンクルスと言う。魔術を使う獣であると定義された魔獣とは、根本から違う」
「ホムンクルス…そんなの、昔見世物小屋で一度見たきりだよ…。あ、あれ？　でも、ホムンクルスって圧死とかでは死なないはず…」
「その通りだ。だが、何をしても死なないわけではない。ホムンク

ルスには、血の代わりに魔力が流れているのだが、今の術で、その流れを断ち切り、破壊した」
「つまり、心臓を壊したってこと？」
「ああ、そう解釈してもらって構わない。だが、恐らく、魔力の流れを強く妨げる魔術を覚えている者はここの魔術師にはいないだろう。先を急ごう」
「うん、そうだね」

ルーニャがそう応えて、歩みを進めようとしたまさにその瞬間だ。
天井が崩れ、そこからホムンクルスが現れた。
ホムンクルスは、ヴェルガには背を向けてルーニャのみを狙っている。
「レイ・ヴェー・ラ…」
ヴェルガが詠唱するも、遅すぎると判断し、詠唱を放棄し、走り出した。
「ジャミューン！１８９４…」
ルーニャも手のひらを前方のホムンクルスへ向けて詠唱を始めるが、発動の度に八桁の認証番号を唱えねばならない『ポンパ・ポップ』では遅すぎる。

終わった。一巻の終わりだ。誰もがそう思った。
が、結果は覆される。
ヴェルガが布を解き、その左手でホムンクルスの背中に触れた途端、ホムンクルスが破裂したのだ。
周囲に、ホムンクルスの血が飛び散った。
「ふぅ…。ぶっつけ本番だったが、使えるな…」
「ふ、ぁぁぁぁぁ…」
極度の緊迫から開放されたルーニャが、再び腰を抜かして座り込んだ。
だが、ヴェルガはルーニャの右手を掴み、走り出す。

時折、ホムンクルスが現れるが、華麗に身をかわしては、ホムンクルスの背中の魔方陣に左手を当て、粉砕した。
その度にヴェルガは、顔を僅かにしかめて声を漏らす。
（やはりな。無理には代償が伴うものか…）
魔力に指向性を持たせる水晶に魔術式を込め、自らの手のひらに突き刺して握りこむことで魔術線の延長として水晶を機能させ、単純に魔力を流す事で、皮膚を介さず魔術線を直接対象に打ち込むことを擬似的に再現することにより、一気に膨大な魔力を流し込むことが出来るようにした。
こうすれば、ホムンクルスの血管である魔術線の容量を超える量の魔力を、背中の魔法陣からとはいえ一瞬で流し込むことができ対象を破裂させることが出来る。
これが左手の仕組みだ。
しかし、魔力は、魔術線→傷口→水晶→対象と放出されることになり、前後両方への指向性を持つ水晶からの逆流もあって、水晶を仕込んでおいた方の手には重大な負担が掛かることとなる。

その推測の通り、ヴェルガの左手からは、鮮血が溢れ出ていた。
それでも、ヴェルガは魔力を流し込み、代償を左手に受けて進む。

どのくらいの血が流れただろうか。
グレートフロウの流れが元に戻ったのを感じ、ヴェルガは左手の水晶を全て捨てて、ルーニャに気付かれぬ内に布で左手を包んだ。
治癒魔法を掛けようにも、右手に魔術を流せば左手にも魔力が流れてしまう。
そうなれば傷は悪化する一方だ。

布を血に染めながら、ヴェルガは遂に目的の場所に到着する。
扉にはリバルド帝国の紋章が刻まれており、扉自体は蝶番を含めてかなり分厚い。

すると、ヴェルガの右手が扉に触れて、魔力を流し込んだ。
暫時もせずに、返事が返る。
「よく来てくれた！奴らの攻撃のせいで、魔力回路が壊れて扉が開かなくなっちまったんだ！早くこいつを開けてくれ！」
男の声だ。
恐らく、この研究所の人間の物だろう。

「解った。少し離れていろ」
ヴェルガは言って、荒い息のまま、紋章に人差し指を突いて詠唱を始めた。
「レイ・ヴィー・ギルア・ギルア・ギルア」
詠唱するが早いか、轟音が響いてドアが粉々に砕け散った。
破片は砂となり、辺りを覆う。…再び傷が広がった。

「ありがとう！助かった」
激しい痛みを感じ、一瞬俯いたヴェルガの目前に、先ほどの声の男が現れた。
「ああ、礼には及ばない」
ヴェルガがそう言った直後、次々に逃げ出していく魔術師達の足音の中に混じって声が発せられる。
「ヴェルガ、何をしに来たのだ」
「所長！」
その声に目を輝かせたのは、ルーニャだ。
ルーニャは、部屋から現れた、顎鬚を蓄えた大男に抱きつく。
男も、ごつごつと血管の浮き出た右手でルーニャの頭を帽子越しに撫でた。

割って入るように、ヴェルガが最初の言葉に答える。
「ディンゴか。久しいな。…間抜けな研究所が化け物に襲われて二

進も三進も行かんとルーニャから聞いて、駆けつけてのだ」
「そうなのか？　ルーニャ」
「うん、この人ならどうにかできるかもって、帝国騎士の人に聞いて、頼みにいったんだ」
「…と言うわけだ。さ、報酬を払ってくれ。私も暇ではない」
ヴェルガの要求に、ディンゴと呼ばれた男は顎に手を沿え、瞳を閉じて暫時思案し、応えた。
「ふうむ…分かった。報酬を払おう」
「話が分かって助かる」
「さあ、ルーニャ」
「え…？」
ルーニャの背中が大男によって優しく押される。
ルーニャは男を見ながらも、ゆっくりとヴェルガの方へと歩いて行った。

次の瞬間、ディンゴの口から信じられない言葉が飛び出た。
「報酬はその娘だ」
「なんだと？」
「ええっ！？」
二人が驚きの声を漏らした。
ディンゴは背を向け、研究所の奥へと進んで手を振りながら、言う。
「今回は我らの正式な依頼ではない。故、国庫を開けることに適わんのだ。だがルーニャには無限の可能性が封じられておる！ヴェルガならばその可能性を生かすことが出来るだろう。ルーニャも心配するでない。酷いことをされたら、いつでも帰ってくるのだぞ！はっはっはっは！！」
豪勢に笑って、ディンゴは暗闇へと消えていった。

驚くほどに静まり返った空間。

二人は暫し呆然と突っ立っていたが、ヴェルガは視線をルーニャに落し、ルーニャも見返し、ほぼ同時に言った。

「「…よろしく…」」

これが、始まりだったのかもしれない。

【〜〇?〜オリジン・?】

瞳に焼きつくような青空の下、円盾を左手に、右手にロングソードを持つ白い鎧の兵士が、大きく雄叫びを上げて、二メートル以上の身長を持つ黒い鎧の騎士へと剣を振り下ろした。

黒い鎧の騎士は、土を掘り返しながら勢い良く駆け出して間合いを詰め、剣を持つ白い鎧の兵士の右拳を左手の盾で止める。

こちらの盾は、円盾ではなく、アイロン形のものだ。

黒い鎧の騎士は、兵士の剣を止めたまま、右手の短く肉厚な重い短剣を白い鎧の腹部へ滑り込ませるが、左手の円盾がその一撃を止めた。

一歩、二歩、マントを翻して黒の騎士が退くと、ここぞとばかりに白の兵士が切っ先を黒の騎士へ向けて走り出す。

一方黒の騎士は、その場にどっしりと構えて右手の短剣を盾の裏に隠してしまった。

黒い兜の、縦に覗き穴の切られたバイザーの奥、雲間から覗いた陽光を受けて赤い瞳が輝く。

剣を隠したとはいえ、左手はシールドによって塞がれている。

つまり、黒の騎士の短剣は私から見て左側から出てくるはずだ。

そんな白の兵士の考えは、あっと言う間に覆された。

「ぐあっ…！」

軽装を生かした白の兵士の突進の間に、黒の騎士は短剣を盾と持ち替えていたのだ。

左手にもたれた重い剣が、驚き怯んで速度を落した白の兵士に振

り上げられる。

白の兵士が、空に煌くその黄金の短剣に目を奪われていた隙に、黒の騎士の右足が盾を強く蹴って円盾を割り、その一撃を踏み込みとして剣を振り下ろして、白の兵士の剣を叩き折った。

黒の騎士が剣を納める背中に、白の兵士が跪くのに、そう時間は掛からなかった。

【〜〇?〜オリジン・?】

…なにもかも、変わってしまった。

「待て！止めろ止せ！違う！」

「でもこれくらい薄ければ…」

次の瞬間、グシャっと音が鳴って、地面に粘性の高い液体と白い殻が撒き散らされた。

「ああ…ごめん」

「だから卵は引き裂くのではなく割るものだと…はぁ、もういい。君はテーブルに座っておけ」

「ごめんね」

「経験が無かったのは仕方の無いことだ。本でも読んでるといい」

「うん」

そう返事し、キッチンからテーブルのほうへ走り出したワンピース姿のルーニャを、エプロンを着けたヴェルガは、思い出したように呼び止め、忠告した。

「言い忘れたが、二つある棚の右の棚は開けるんじゃないぞ」

「はーい！」

ダイニングに戻ったルーニャは、短い金髪を揺らして古い木製の本棚に取り付いた。

二つある内の左の棚は、ガラス張りの扉がついており、中の本が見えているのに対し、右側の棚は鋼鉄製の上に厳重な扉によって塞がれ、大きく重そうな鍵がぶら下がっている。

「……」

気付けば、ルーニャの視線はその鍵に釘付けとなっていた。

ゆっくりとその棚に近づくと、ルーニャは鍵に手をついて詠唱を始める。

『ポンパ・ポップ』は、元々鍵師の魔術で、鍵を開ける為のものなのだ。

「ジャミューン、１８９４８８９４」

唱えると、ルーニャの頭の中に、鍵の中身がイメージとして映し出され、その鍵の中を青い液体のようなものが満たしていく感覚をルーニャが感じた。

「１０１１．０１００．１１０１．００１０」

数列。

「１０１１．０１１０．０１０１．０１１０」

数列

「１１０１．１００１．１０１０．１００１解除」

ルーニャの言葉に呼応して、鍵の開く感覚が人差し指に伝わり、重厚な音を立てて鍵が落ちた。

「好奇心って、罪だよね～」

さぞ如何わしい本が隠れているのだろうと、期待と不安を胸に鉄製の重い扉を開けると、そこには数冊の本が、並んでいた。どれも分厚く、背表紙の文字は霞んでいる。

その内の一冊に、ルーニャが手を伸ばした刹那、声が飛んだ。

「それに触れるんじゃない！！」

柄にも無く怒鳴ったヴェルガは、手に持ったオムレツをテーブルに置き、ルーニャの頭を二度軽く叩くように撫でて本をとった。

「大声を出して済まない。…だが、よくもこの中で最も危険な本を手にとれるものだな」
「ごめん…」
「いや、好奇心は罪ではない」
「ところで、これって何なの？」
ルーニャが聞くと、ヴェルガは本をぱらぱらと捲って応える。
「これは、百年前に『リヴァイダー』という竜飼いが残した本で、手順を踏めば百とも二百とも言われる数の竜の軍勢を呼び出すことが出来るものだ。世界中の猛者が欲する貴重な本なのだぞ」
「ふーん…。ヴェルガは使わないの？」
「使いたいのは山々だが…呼び出した竜達に召喚者を襲わないという理性があると、誰が保障するのだ？　その上、ここには、一頭で全てを崩壊させるほど凶暴な竜の軍勢と書かれている。昔一頭の竜と一戦交えたが、懲り懲りだと思った。それが血気盛んな竜数百ともなると…私も崩壊させられる全ての内の一に甘んずる方を選ぶよ」
「なるほどね…」
「さあ、冷める前に朝食を頂くとしよう」
「うん！」
ルーニャを食卓へ向かわせると、ヴェルガは本を本棚へしまって鍵をかけなおした。
その時、ずれたモノクルを指先で持ち上げたヴェルガの耳に、突然、何の前触れも無く物音が飛び込んだ。
ドアを叩く音だ。
「デジャヴュ…か」
空腹のイライラに眉を顰めながら、ヴェルガは扉を開いた。

…そこには、背の低い、太めの老人がいた。
周囲に数人の取巻きを拵え、真紅のマントを羽織っている。
「…ルンデン男爵」
ヴェルガはこの老人を知っていた。

この老人は、『ルンデン料理店』のオーナー『ルンデン・ルーデリア・リドリア男爵』だ。
一代にして、所謂チェーン店の仕組みを作り上げ、財を成した大富豪で、その資産は小さな国ならば買い占められるといわれている。

ヴェルガが名を呟くと、ルンデン男爵は、涙目でヴェルガの瞳を見上げ、ヴェルガの体にしがみ付いて情けない声を出した。
「ヴェルガぁ…ワシを助けてくれぇ～！」
上がったばかりのYシャツが涙で濡れていくのを感じながら、ヴェルガは溜息をつく。
その溜息は、瞳に焼きつくほどの青空に溶けていった。

【〜〇?〜貴族の意地】

【〜〇?〜貴族の楽しみ】

「ともかく、お話をお聞かせください、男爵」

取巻きごと家に招き入れると、半べそを掻いた男爵を、真新しい黒いクッションを敷いた椅子に座らせ、ヴェルガは話を聞くことにした。

ヴェルガの憂鬱もよそに朝食を平らげたルーニャを隣へと座らせ、ペンを持たせてメモを取らせる。

「つい、先日のことじゃ…。戦士競技会があったのじゃ」

「そういえば…そんな季節ですね…」

戦士競技会。それは、戦術競技会、戦列競技会などと並んで『三大戦技会』と呼ばれる大きな戦力競技会だ。

五十メートル以内の距離において、戦闘の意思を持つ戦士同士が一対一で戦う。ただし、故意に殺害することは許されない。

これのみがルールで、正々堂々とした戦法ならば、ロングソード、ミドルソード、ショートソード、ハンマー、ランス等の刀剣鈍器はもちろん、魔術、魔法、クロスボウ、その他諸々何でもありだ。

とはいえ、この競技会に参加するのは、千人に一人ほどの武を持つ者ばかりである。

この猛者の眼前においては、魔術やクロスボウの攻撃などは魔力障壁などによって打ち消され、逆に、魔力障壁などは研ぎ澄まされた剣撃によって叩き斬られてしまう。

そうなれば、対等に打ち合う事が出来るのは近接武装のみとなる。

政を忘れ、ひたすらに戦のみを追い求める武人の祭典。それが、戦士競技会なのだ。

戦士競技会は、勝ち残り式トーナメントで行われ、志願者全てが

参加できる第一次戦、準決勝である第二次戦、決勝となる第三次戦とあるのだが、その内の、第一次戦が行われる季節、これがこの初夏の時期なのである。

件のルンデン男爵は、この戦士競技会の常連であった。
しかも、毎年決勝へ武人を送り込み、二度の優勝を経験した人物だ。

今年も優勝候補と専らの噂であったのだが、そのルンデン伯爵が言うには、第一次戦で敗北を喫したそうなのである。
「敗北したのですか」
「そうなのじゃ…ワシの兵団の選りすぐりを戦に向かわせたのじゃが、僅か数分で…盾を割られ、剣を折られ、膝を突かされたのじゃぁ…」
「それはまた屈辱ですね。盾は貴びの象徴。剣は武人の象徴ですからね……ところで、盾を割られたと仰いましたが、ジャックランタンは今年から盾を装備したのですか？」
「それなのじゃあ～！」
痛いところを突いてしまったようで、ルンデン男爵は涙を流しながら机に突伏し、わんわんと泣き喚いた。
おまけに悔しそうに机を強く叩いている。
非常に分かりやすい反応だ。

追記しておくと、ジャックランタンとは、ルンデン男爵の騎士として契約を結んでいる魔物の女性である。
頭には鉄製のカボチャを被り、体の全てはマントで隠され、マントの中には黒い拘束衣を纏って身を隠しているという特殊な人物である。
ところが色物と侮ること無かれ。
彼女のレイピアの腕前は神懸り的な上に、どうゆうトリックか胴

体の長さを変えたり体重を軽くしたりというめちゃくちゃな戦法を使い、数々の猛者を斬り捨てて来た実力者。
それがジャックランタンなのだ。

此度、そんな魔物剣士に、なにかあったらしい。
「なにがあったのです？　怪我などではないでしょう？」
「ワシが…ワシが新たな騎士を雇おうかなどと口にしたからなのじゃぁ～！」
「と、いいますと？」
「良くぞ聞いてくれたヴェルガ～！」
…話を聞けば、つい先月、ジャックランタンを労って言ったつもりの「新たな騎士を雇おうか」という男爵の言葉を、ジャックランタンが「貴様だけでは力不足だ。新たな騎士を雇おうか」と受け取ってしまったらしく、泣きながら屋敷を出て行ったというのだ。
「もう…何もかもが想像できませんね」
「奴はああみえてナイーブなのじゃ…」
「はあ…」
そこまで聞いて、ヴェルガは結論を出し、確認した。
「では、ご依頼は“ジャックランタンを連れ戻す”ということで宜しいですね？」
「いんや！違う！」
「ほう？」
十中八九そういうことだろうと予想していたヴェルガは、予想だにしない回答に、興味を傾けた。
この地の文で分かるだろうが、ヴェルガはこの話を大分適当に聞いていたのである。
何を隠そう、ルンデン男爵は負ける度にこうして愚痴をヴェルガに聞かせるからだ。
大事なクライアントではあるが、正直ウンザリはしている。
今回の本物の依頼というはその事にも関わっていた。

「ジャックランタンの事はワシが何とかする！　だが、兵士とはいえワシの選んだ兵があっさりと、辱められて倒されるのだけは我慢ならんのじゃー！！」
「なるほど…」
「という訳でヴェルガ、あんたに頼みがある！　ワシの剣となって、名誉挽回してくれぇ！！ヴェルガにしかできないんじゃ！！！金に糸目はつけん！！」
身を乗り出して、ルンデン男爵が懇願する中、
「ふむ…」
静まり返ったダイニングに、腕を枕に机で眠るルーニャの寝息だけが、ゆっくりと響いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1931z/

君にしかできないっ！【考察する魔術師】

2011年12月14日23時50分発行